

琉球大学学術リポジトリ

未経験の事象の生起は如何に予測されるか (1) 序報

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2010-05-24 キーワード (Ja): コミュニケーションのメディアの効果, 予期 キーワード (En): 作成者: 高良, 美樹, 永田, 良昭, Takara, Miki, Nagata, Yoshiaki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/16927

未経験の事象の生起は 如何に予測されるか（１）序報

How do people really predict their future life events
without their past experiences about these events? :
A preliminary report.¹⁾

高 良 美 樹（琉球大学法文学部）
永 田 良 昭（学習院大学文学部）

Miki TAKARA

(College of Law and Letters, University of the Ryukyus)

Yoshiaki NAGATA

(Faculty of Letters, Gakushuin University)

われわれの生活には、未経験の事象の生起を予測しつつ、それに対処すべく行為する過程があると思われる。ここで未経験というのは、今夜、明日に何が生じるかではなく、時間的に、あるいは空間的に生涯にわたって本人自身は経験する可能性がないかもしれないような、少なくとも結末を自らは体験しない可能性がある事象を意味している。こうした問題に対処するための行為を惹起させる条件は何かを明らかにすることを研究の目的として、これらの事象が自らに振りかかることを想像することと関連する要因について、当該の事象に関する情報源との関係という面から検討した。身近に経験者をもつこと、あるいはマス・メディア等による情報との接触と自身の経験の可能性の予期的想像は、ある種の事象においてはその関係が明瞭に見られたが、その関係の見られない事象も少なくないことが示された。

キーワード：コミュニケーションのメディアの効果、予期

問 題

自らは経験のない出来事をあらかじめ予想して、対処の方策を講じておくことは誰でもありそうに思われる。

残された家族の生活を考えて生命保険に加入する場合、自分の死後の家族の生活を直接見聞した上で決定するわけではない。また、必ずしも生命保険に救われた知人の経験を目にしているとは限らない。火災保険に加入する。しかし、火災で苦勞した経験があるとは限らない。老後の生活を考えて貯蓄をする。大規模な地震に備えて避難訓練を行ない、食料を備蓄する。大災害を予想して家族の集合場所を打ち合わせておく。人によって程度は異なるとしても、このような万一の場合に備えての対処の行為はありそうに思われる。しかし、あらかじめの対処行動の実行が困難であるが故に寺田寅彦のように“災害は忘れた頃にやってくる”と、大災害を思い出す記憶すべき日々過去の教訓の思い出が語られる可能性もある。

この種の問題は、時間的な点で、経験の可能性がない、あるいは極端に少ない場合だけにみられるわけではない。庭の植木に散水することが水源の枯渇のために給水制限に苦しむ人々を一層困難な目に合わせている可能性や、自家の生活排水が遠隔地の水源を汚していることなどは、行為者自身が影響を受けている人々の被害の実態を実際に見る機会はないかもしれない。あるいは、因果関係すら実感としては認識していないかもしれない。

“自分一人ぐらいの努力は無意味である”といった表現をすれば、“只乗り”はよく云えば効力感の問題であるが、倫理感というものに信頼を置けば、因果関係への自己の関与の実感のなさがなせることとも云えよう。

人口増に悩む国は、産児制限を呼びかけ、逆に人口の減少を恐れる政府は出生数の増加を呼びかける。しかし、人口の増減の直接の影響を個々の人々が直接経験するには次世代まで時間が必要かもしれない。あるいは、必ずしも最低のカロリーの確保のためでなしに、食品の輸入に多額の資金を用いる

富裕な国の行為が食料の高騰を招き、遠隔地の食料難に拍車をかけているかもしれないと考えるには豊かな想像力が必要とされそうである。

しかし、知識の獲得にはおそらく想像力が必要ではないであろう。死という必然のことも、火災、災害、失業、疾病など、かならず経験するとは云えないことも、いずれは生じる可能性があることを知識として知ることは、比較的容易であろう。しかし、知識が、必ずしもそれに対処する行為とは結びつかないことはしばしば指摘されることである。

アメリカは急速に人口過剰になりつつあるとの認識をもつアメリカ人が、その知識と自分の家族計画をむすびつけているわけではないことが指摘されている (Mercer, 1975)。この問題について、Mercer (1975)は、“将来に関わることについて十分思慮深く行為することができるためには、その将来の状態を鮮明に生き生きと思い浮かべられる必要がある”とのKaplan (1972)の指摘を“おそらく正しいにちがいない”と述べている (訳書 280頁)。

この研究の最終的な目的は、自分自身では結果を直接に確かめることができないうか、論理的な意味での結果が、時間的、空間的な隔たりをもって生じるか、結果そのものの予測が困難な事象への対処行為が、どのような機構によって遂行されるのであろうかという問題に答えることである。論理的な意味での結果と限定した理由は、周囲の人々がその行為を好感をもって評価するなどの、本来はその行為の直接的な結果とは言い難いフィードバックによって行為者自身は結末を認識したと理解している可能性が否定できないからである。その意味では、その結末が論理的には時間的、空間的な隔たりをもって生じるか、結果そのものが論理的には予測が困難である筈のことを予期した行為が、どのような機構によって遂行されるのであろうかという問題の設定は、発生の機構が異質である雑多な行為を包括し過ぎている可能性もっている。しかし、その可能性の検討も含めて、このように包括的に問題を設定することは、発生の過程に異質な機制が含まれているという暗黙の前提によって、従来は個別にとり挙げられてきた行為の機構をこれまでとは異なる

視点から統一的に検討する手懸かりを提供する可能性もあり得る。

ここで設定した問題に対する一般的な回答の可能性をもつ理論、あるいは体系的な現象の記述はほとんどないように思われる。しかし、いくつかの手懸かりはこれまでの研究から提出されていると思われる。

たとえ論理的にはあるべき結果のフィードバックとは異なるものであっても、行為者自身には結果のフィードバックがあり得ることを考慮すれば、行為者に対して何がフィードバックの機能をもつかを考慮することが問題への回答を得る一つの方法になろう。すなわち、原理的には伝統的な強化による説明が可能である。その場合は、ある事象がある行為へのフィードバックであると認識される機制は何か、単に時間、空間的な近接性、既存の知識、予期といったもので説明可能かという学習の生態的過程の研究が必要となろう。

未経験の事象の中には、本人自身が強化あるいは消去を経験する可能性がないだけであって、他者の行為とその結果を観察する機会があるものもあろう。かりに、問題となる行為のいくつかは観察学習や偶発的な潜在学習の機会が対処的な行為の主因とすれば、観察の機会のほとんどあり得ないような問題への対処行為は極めて困難であることになる。環境汚染などの問題は、それに近い問題であるために、具体的な結末と認めざるを得ない結果が数多く見出されるまで対処的な行為そのものが必要か否かすら予測出来なかったと云えるかもしれない。そのような場合、問題そのものが存在する可能性さえも想像することは出来ないと思われる。問題そのものへの認識がない場合には行為の本来の結果のフィードバックを見出すことすらが困難であろう。

この場合は、問題の発見についての知識の広報に関係すると予想されるマス・メディアの機能と、知識と行為の結びつきを規定する諸要因の複合した過程を考慮する必要がある。広瀬（1995）は、環境汚染に関係する洗剤の使用の問題などを素材に、メディアの影響の可能性も含めた上で、地域住民の間で対処行為にともなうコストを人々が公平に負担しているとの理解、問題を共有しているとの認識、それにとまなう規範的な力への認識が重要な意味

をもつことを指摘している。

ある地域に伝統的な行動の様式を含めた行動規範の問題については、風土病防止のために生活習慣を改める必要があるとするキャンペーンが、生活習慣の変更が伝統的な世界観に抵触するために地域社会の規範に準拠している人々には受容されにくいなど、知識の普及がその知識に基づいた方向への行動変容に結びつくことが困難な例が報告されている (Rogers, 1982)。

関係ある他者との問題の共有の認識が、行動の変化、惹起の要件であるということは、他者の経験、他者の見解などを伝達するマス・メディアの影響も考慮される必要があることを意味していると思われる。マス・メディアの影響はこれまでの研究者が予想していた以上に大きいと云われる (Noelle-Neumann, 1980)。

われわれが取り上げようとする問題は、行為の結果を直接に評価できないか、評価が困難な場合の予期的行為に関する問題であるが、別の表現をすれば、行為者が他の選択肢を選んだ場合との結果の比較ができない場合の行動選択の問題とも云える。例えば、政党支持の妥当性を検証する方法は、容易には見出されない場合が多いであろう。異なる行為の選択をした場合の結果との比較によるフィードバックがあり得ないことが多いと思われる。可能なフィードバックがあるとすれば、いわゆる世評ということになり、これは世論としてマス・メディアや地域の行動規範として表現されることもあろう。

以上の考察は、通常の生活ではほとんど経験することのない事象の生起の予想とそれへの対処の行為を念頭においたものである。未経験の事象ということ自体が、必然的に日常の茶飯事でないことを意味する。例えば、小学生にとって、企業、官庁その他で、何らかの責任を伴う職務を勤める生活の経験は未経験であると云えよう。しかし、ほとんどの小学生はいずれは自分もこうした立場に置かれることは予想していると思われる。すなわち、あらためて予想する必要がない程度には、少なくとも知識の源泉としては身近な大人の生活にその一端を知る機会が多いと思われる。これも未経験の出来事に

未経験の事象の生起は如何に予測されるか（1）序報（高良・永田）

属することではある。しかし、ここでは、未経験の意味を鮮明に浮き彫りにするために、やや極端な例を素材に取り上げる。

その極端な事例の中には、場合によっては、それを予想して日々の生活の何ほどかの努力をその対処の行為に割くことが望ましいかどうかは一概には論じにくいものも含まれている。すなわち“杞憂”に属することがらは、それについて考慮しないことも重要な意味をもっていると考えられる。このことから、未経験の事象の生起を予測して対処の方策をあらかじめ考慮することが望ましいとの前提を置くことはできないであろう。

ここに報告する研究は、以上のような考察を背景として、これらの問題についての体系的な研究の出発点として、本人自身がこれまでに経験したことのない事象を自らが経験する可能性をわれわれがどのように予想するのか、そして、その予想に関係する要因は何かを明らかにしようとした研究の第一報である。ここでは、とりあえず未経験の事象が自己に生起するとの予想がそれぞれの事象においてどの程度生じるか、また、予想の程度と知識の源の種類との関係はあるのかといった素朴な問題から出発する。

予想と、それへの対処の行為の遂行とはまた別の問題であると考えられる。しかし、予想しない事象への対処の行為が意図的に生じるとは考えにくい。すなわち、予想の有無を規定する要因をまずとり上げる所以である。

方 法

（1）予期的想像の程度を検討する事象の選択の方針と教示および質問の形式：ある事象の生起予想の有無あるいは有無の程度が意味をもつのは、予想の有無が本人の生活にある程度の影響を与える場合であると考えられる。また、事前に対処しようとするのが意味をもつのは、多くの場合本人には負の影響が及ぶと予想される場合であろう。高額の宝くじに当選する可能性は予期する必要のないことであろう。それは予期しない幸運が訪れても、そ

のことによって窮地に陥ることは少ないからである。予期することによってあらかじめ多額の借財をする人は多くはないであろう。

以上の考察から、ここで取り上げる事象は、原則的にはそれが生起することが一般には歓迎されないとと思われる事象である。しかし、対照の意味で若干の歓迎されるとと思われる事象を追加している。

具体的には“あなたは、次のようなことをあなた自身に振りかかる問題として想像したりすることがありますか”の教示によって、次のA～Tの20の事象について、1. しばしば想像する、2. 時々想像する、3. たまに想像することがある、4. ほとんど想像したことはない、5. まったく想像したことはない、の5段階で回答を求める。なお、本稿では、回答1のほうを予期的想像が高いと表現する。A～Tの事象は以下の通り。

- A. ますます核家族化がすすみ、身寄りとはなれて孤独な晩年を過ごす。
- B. 理想の結婚相手を得る。
- C. 大地震のために住む家も、周囲の家も倒壊する。
- D. 戦争が始まり、兵士や軍の要員として戦場に出る。
- E. 近隣の火災がもとで自宅が全焼する。
- F. 道路を歩行中、暴走してきた自動車にひかれて怪我をする。
- G. 重病にかかり、一生普通の社会生活が出来なくなる。
- H. 乗っていた電車が脱線して、怪我をする。
- I. 病気や事故で家族を失い天涯孤独の身になる。
- J. 事故による核爆発によって致死量の放射能をあびる。
- K. 世界的な天候異変のために食料が不足し、あなた自身も飢えに苦しむ。
- L. 卒業に必要な単位が取れず4年で大学を卒業できない。
- M. 乗っていた飛行機が墜落し、命をなくす。
- N. 高齢になって、寝たきりで動けなくなる。
- O. 思わず万引きなどをして周囲の人の信用をなくす。
- P. 家に泥棒が入り、大切なものを盗まれる。

未経験の事象の生起は如何に予測されるか（1）序報（高良・永田）

Q. いままで気づかなかった自分の意外な才能を発見し、人生が一変する。

R. 知らずに悪いものを食べてひどい食中毒になる。

S. 道路を通行中、ビルの上から看板が落ちてきて怪我をする。

T. 大学を卒業しても自分の満足できる就職口が得られない。

事象のB、Q、が、結果が一般には歓迎されると思われる例である。また、それぞれの事象は、可能な限り努力の欠如、無責任など本人の責に帰せられるものではないと推定できるように表現してある。A～Tは無作為に配列した順序を示す。

以下ではこの資料を予期的想像と云う。また、以下でそれぞれの事象に言及する場合は、他の事象と混同されない程度に省略して表現する。

（2）情報源についての質問：情報源についての質問は、事実として解釈するためには、情報源とされた媒体あるいは人に照合して事実か否かの確認が必要であろう。一般的には、誤った結論を得る相当の危険を伴うと思われる。回答者は、意図することなく日頃自分がしばしば接触する情報源に自らの得た情報の源を求めると考えられるからである。しかし、ここでは、とりあえず、本人自身の報告によって資料を収集した。情報源を確定するための方法として、本人の報告と媒体の提供した筈の情報の照合を行なうことは、とくに媒体として他者を考慮する必要のあるこの研究のような場合には事実上不可能に近いであろう。それを補う方策として、われわれは本人の報告する情報の質的分析によって情報源の相違が裏づけられる可能性はないかを検討することをこの研究の一環として考慮している。しかし、これは、現在、資料の収集の途上にあり、今後の検討課題である。

今回の研究では“あなたは、これまでに次のような出来事を実際に自分自身で体験したり、見たり、聞いたり、読んだりした事がありますか。小説やSFの話ではなく、現実の出来事として以下のような出来事を見聞したかどうかをお答え下さい”という教示で、以下の6つの選択肢から該当するもの

を制限なしでいくつでも選択することを求めた。次のような出来事とは、上記のA～Tであり、それぞれを先の経験、見聞の有無と同じ表記で記載し、それぞれ毎に下記の項目を用意して選択を求めた。

(1. 自分自身体験したことがある。) 2. 親・兄弟など家族に経験者がいる。3. 親戚・知人に経験した人がいる。4. テレビで見たことがある。5. 新聞や本などで読んだことがある。6. 体験も、見聞きしたこともない。

なお、1は実際にはほとんどあり得ない事項についてであるのでカッコで囲みである。また、6. は、ここで取り上げている事象に関しては、おそらくは事実とは違い可能性があろう。また、質問項目としては、情報源が他者の場合には、マス・メディアの情報の伝聞が他者からの伝聞として混入する可能性を排除しようとしたために、伝聞とせずに、経験者の存在の有無の知識として回答を求めた。従って、論理的には経験者本人からの直接の情報とは限らないことになる。この2項、3項については、回答者の記憶としては他の媒体からの情報との混同は比較的少ないと推測される。

原則として、とくに言及しない場合には1すなわち自身が体験したものは当該事項の集計からは除外される。ここでは、2、3に回答した場合をパーソナルな伝聞をもつと呼ぶ。

以上のほかに、上記のA～Tについて、自分自身ではなく、周囲の身近かな人に振りかかることを想像することがあるか、という趣旨の質問を試みた。しかし、今回の報告では、その結果には触れない。

(3) 調査回答者：東京都内の大学に通学する男女大学生各 110名。平均年齢は男性、女性とも、19歳余で範囲は18歳から21歳である。ただし、年齢無回答が男性2名、女性4名含まれている。年齢から見て成人一般に比べると、ここで取り上げた事象についての本人自身の経験は少ないと予想される。男女各110名とは、男性、女性の比較を容易にするために、収集された男性の回答者数に合わせて女性の回答を約20名無作為に除外した結果である。

未経験の事象の生起は如何に予測されるか（1）序報（高良・永田）

（4）資料収集時期：1988年～1989年。

結果と考察

（1）予期的想像およびパーソナルな伝聞の有無について： 図1-1と図1-2に男女別に予期的想像の平均値とパーソナルな伝聞をもつ者の比率を示した。性差の検出はこの研究の目的ではないが、両者の資料を合併して検討することが可能か否かの見通しを得るために区別して示した。男性と女性の予期的想像の得点の順位はほぼ対応しており、また、パーソナルな伝聞のある者の比率も大筋においてはほぼ近似した数値を示している。

次に、予期的想像の高さとパーソナルな伝聞のある者の比率の対応関係を概観すると、必ずしもよく対応しているとは言い難い。取り上げられた事象の属する母集団がおそらくは多次元的であると思われるので、一元的に見た順位の相関は求めている。しかし、例えば、“寝たきりになる”ことは、パーソナルな見聞の機会は相対的に少なくないが、男性も女性も予期的想像の得点の順位は低い。それに対して“万引き”はパーソナルな伝聞の機会が全体の中位にあるが、予期的想像の程度は男女とも最下位である。

しかし、“理想の結婚相手” “大学留年” “就職不満足” は予期的想像も高く、またパーソナルな伝聞のある者の比率も高い。しかし、“意外な才能”の発見は、予期的想像は4位と高いが、パーソナルな伝聞は男女で順位に多少の相違はあるものの伝聞のある者の数の順位は低く、相対的にやや順位の高い女性でも比率は10%未満である。

パーソナルな伝聞は質問項目の内容から見ても、ある程度までは、現実の生起率を反映している可能性がある。しかし、パーソナルな伝聞と自己自身にそれが生起する可能性を考慮する予期的想像とはそれほど単純な関係を示していないことが示唆される。

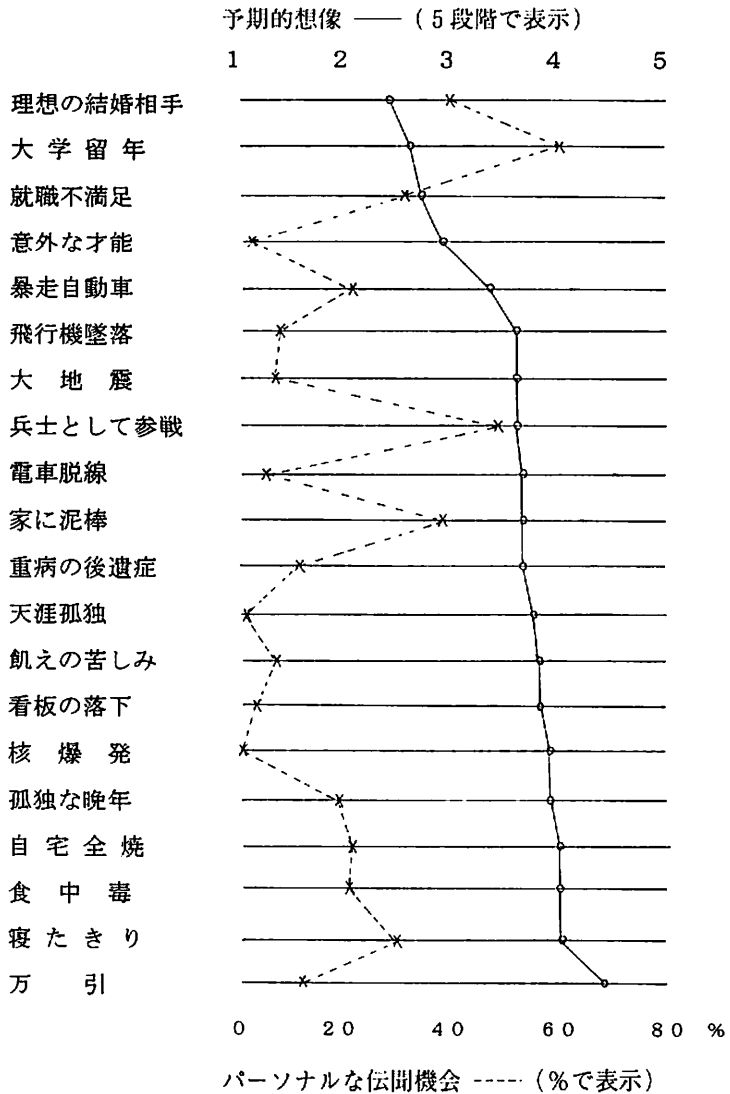


図 1-1 予期的想像とパーソナルな伝聞機会の関係 (男性)

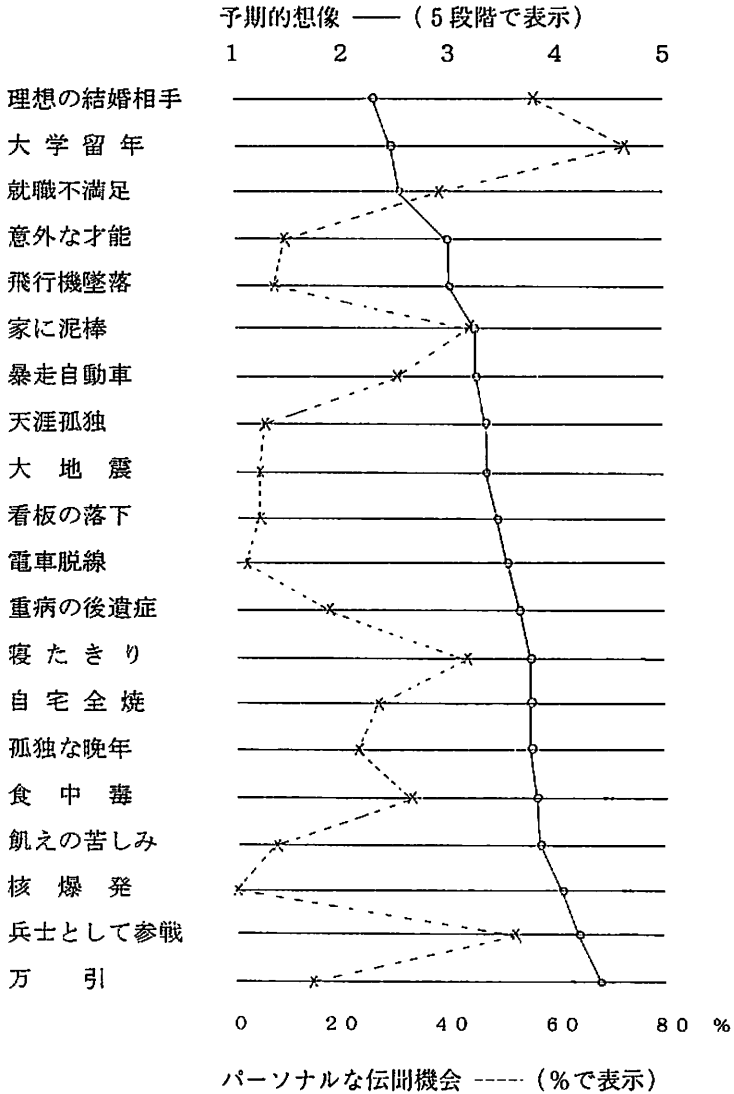


図1-2 予期的想像とパーソナルな伝聞機会の関係 (女性)

表 1-1 「自分自身への生起予期」の各事象間の関連（男性）

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
A		.269**	.187	.184	.149	.197*	.246**	.048	.373**	.209*
B			.085	.084	.111	.138	.173	.110	.157	.009
C				.461**	.395**	.266**	.242*	.319**	.389**	.466**
D					.252**	.296**	.193*	.181	.345**	.439**
E						.422**	.558**	.497**	.486*	.377*
F							.396**	.373**	.366**	.309**
G								.434**	.488**	.296**
H									.354**	.411**
I										.422**
J										
K										
L										
M										
N										
O										
P										
Q										
R										
S										
T										

	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T
A	.155	.142	.112	.207*	-.079	.079	.104	.315**	.054	.157
B	.014	.104	.155	.064	-.015	.065	.440**	.088	.179	.081
C	.404**	-.110	.414**	.289**	.023	.263**	.119	.189	.312**	.115
D	.358**	.088	.385**	.216*	.058	.154	.256**	.107	.204*	.117
E	.376**	.168	.485**	.367**	.127	.484**	.207*	.315**	.307**	.186
F	.204*	.031	.204*	.299**	.099	.371**	.037	.355**	.396**	.189*
G	.330**	.294**	.435**	.473**	.243*	.447**	.255**	.495**	.357**	.407**
H	.339**	.229*	.471**	.343**	.043	.567**	.099	.305**	.350**	.316**
I	.328**	.196*	.484**	.434**	.143	.337**	.131	.239**	.337**	.196*
J	.479**	.208*	.399**	.374**	.101	.339**	.134	.277**	.277**	.195*
K		.011	.295**	.499**	.140	.414**	.250*	.297**	.440**	.126
L			.283**	.156	.177	.242*	.162	.147	-.007	.394**
M				.339**	.080	.416**	.140	.176	.262**	.266**
N					.147	.415**	.091	.417**	.333**	.273**
O						.114	.226*	.043	-.012	.200*
P							.252*	.445**	.346**	.274**
Q								.239*	.172	.157
R									.380**	.208*
S										.226*
T										

¹⁾ 各アルファベットは、以下の質問項目（略称）を示している。

A：孤独な晩年 B：理想の結婚相手 C：大地震 D：兵士として参戦 E：自宅全焼 F：暴走自動車
 G：重病の後遺症 H：電車轢線 I：天涯孤独 J：核爆発 K：飢への苦しみ L：大学留年
 M：飛行機墜落 N：寝たきり O：万引き P：家に泥棒 Q：意外な才能 R：食中毒
 S：看板の落下 T：就職不満足

²⁾ それぞれのできごとに関して〔自分自身体験したことがある〕と答えた者を当該項目の分析対象から除外した。よって、対象人数は分析ごとに異なっており、最大110人、最小98人となった。

* $p < .05$ ** $p < .01$

表 1-2 「自分自身への生起予期」の各事象間の関連（女性）

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
A		-.001	.339**	.192*	.292**	.139	.236*	.195*	.234*	.337**
B			.034	.089	.131	.091	.150	-.080	.112	.080
C				.300**	.361**	.317**	.144	.272**	.242*	.343**
D					.219*	.277**	.296**	.110	.133	.469**
E						.522**	.500**	.308**	.383**	.345**
F							.470**	.359**	.305*	.411**
G								.213*	.393**	.350**
H									.269**	.306**
I										.183
J										
K	.175	.040	.101	.413**	.268**	.192*	-.115	.303**	.161	.232*
L	-.076	-.009	.051	-.002	.088	-.087	.362**	.125	-.070	-.108
M	.243*	.072	.316**	.175	.210*	.142	-.105	.138	.244*	.094
N	.352**	-.034	.259**	.173	.085	-.023	-.081	.166	.151	.005
O	.277**	-.022	.202*	.377**	.198*	.336**	-.100	.278**	.232*	.114
P	.279**	.174	.363**	.215*	.367**	.347**	.097	.269**	.399**	.291**
Q	.332**	.192*	.155	.412**	.281**	.216*	.176	.317**	.300**	.210*
R	.206*	.123	.260**	.165	.338**	.218*	.116	.019	.258**	.180
S	.213*	.054	.279**	.331**	.212*	.197*	.135	.223*	.055	.438**
T	.576**	-.003	.274**	.326**	.176	.210*	.058	.259**	.276**	.026
K		.024	.305**	.309**	.110	.248*	.186	.379**	.376**	.092
L			.169	.046	.262**	.155	.188*	-.069	.138	.092
M				.084	.095	.103	.083	.156	.290**	.127
N					.289**	.375**	-.115	.291**	.140	.277**
O						.420**	.181	.157	.191*	.297**
P							.163	.220*	.289**	.315**
Q								.055	.116	.087
R									.400**	.221*
S										.209*
T										

※各アルファベットは、表 1-1 同様の質問項目（略称）を示している。

※それぞれのできごとに関して〔自分自身体験したことがある〕と答えた者を当該項目の分析対象から除外した。よって、対象人数は分析ごとに異なっており、最大110人、最小100人となった。

* $p < .05$ ** $p < .01$

(2) 事象間の予期的想像の高さの関係：表1-1と表1-2はA～Tについての予期的想像の高さの相関を求めた結果である。今回の調査では、多様な事象を取り上げているため、社会現象としての連関を回答者がどのように把握しているかの検討が必要と思われたために分析を試みた。まず、全体に事象の生起に関する予期的想像は、この20事象に関する限り、それほど高い連関を持つわけではないことが読み取れる。男性の場合で、最も相関が高い場合で.567で、女性の場合で.576である。また、男性と女性で各事象間の予期的想像の程度の関連にいくらか相違がある。関連の高いものの間に共通性が見られるかどうかは、男性と女性とで関連の仕方に相違があることから、一般的な結論を求めることは無理があるように思われる。

事象間の因子的構造を求めることも考えられるが、事象の相互的な関係に関する理論的な考察を得る前に、因子構造を求めることはおそらくは一般性をもつ結論を得る方途とは考えにくい。ここでは、本稿でとり上げた事象の生起に関する予期的想像は比較的強い連関をもつとは云えないこと、その連関の構造は、性別によって相違する可能性があることの指摘にとどめるのが至当であろう。

(3) 情報源に関する本人自身の判断と予期的想像の関係：本人自身が体験した場合を資料から除外して、親・きょうだい、親戚・知人、テレビ、新聞・本、見聞なしをパーソナルな伝聞の中での情報源との距離、マス・メディアの中での予想される真迫性の程度の相違を想定してこの順位での序列づけが可能であろうとの想定のもとで、本人がいずれの情報源を指摘しているかと予期的想像の高、低の関係を検討した。前者は、事象によっては、ある情報源に片寄りが著しく、統計的な検定になじまないため、その場合は当面の検定からは除外した。予期的想像は、図1-1、1-2に示したように当該の事象毎にそれぞれの平均的水準が異なるため、男性、女性それぞれ別に各事象毎にはほぼ中央値の近傍で高低を区分して情報源×予期的想像の高低の検定

未経験の事象の生起は如何に予測されるか（1）序報（高良・永田）

表 2-1 情報源に関する本人自身の判断と
予期的想像の関係：“大学留年”（男性）

予 期 的 想 像	情 報 源	
	家族および知人 ¹⁾	テレビその他 ²⁾
高 い	37 ³⁾	13
低 い	29	31
計	66	44

1) 情報源の家族、知人を合併

2) 情報源のテレビ、新聞・本、見聞なしを合併

3) 人数（合計 110名 体験者なし）

表 2-2 情報源に関する本人自身の判断と
予期的想像の関係：“家に泥棒”（男性）

予 期 的 想 像	情 報 源		
	家族および知人 ¹⁾	テレビ	その他 ²⁾
高 い	21 ³⁾	22	2
	1.811 ⁴⁾	-0.030	-2.463*
低 い	18	30	13
	-1.811	0.030	2.463*
計	39	52	15

1) 情報源の家族、知人を合併

2) 情報源の新聞・本、見聞なしを合併

3) 人数（合計 106名 体験者4名を除く）

4) 調整後残差

* $p < .05$

表 2-3 情報源に関する本人自身の判断と
 予期的想像の関係：“自宅全焼”（女性）

予期的想像	情報源		
	家族および知人 ¹⁾	テレビ	その他 ²⁾
高 い	11 ³⁾	28	1
	0.204 ⁴⁾	1.335	-2.288*
低 い	18	40	12
	-0.204	-1.335	2.288*
計	29	68	13

- 1) 情報源の家族、知人を合併
 2) 情報源の新聞・本、見聞なしを合併
 3) 人数（合計 110名 体験者なし）
 4) 調整後残差
 * $p < .05$

を試みた。情報源は、事象毎に分布が異なるため、検定のための便宜的措置として適宜合併されている。表 2-1 から表 2-4 （“大学留年”（男性）
 $x^2_{(1)}=7.646$ $p < .01$ ；“家に泥棒”（男性） $x^2_{(2)}=8.057$ $p < .05$ ）；
 “自宅全焼”（女性） $x^2_{(2)}=6.520$ $p < .05$ ；“就職不満足”（女性）
 $x^2_{(2)}=9.555$ $p < .01$ ）は、情報源の真迫性の相違を連続的にとらえることが可能と仮定した場合に、情報源の相違と予期的想像の高低の関係が比較的直線的であると思われる場合を示したものである。

表 1-1、1-2 にあるように、ここでとり上げた事象は、現実にはそれほど多くの人々に体験されているわけではない。しかし、間接的な見聞であってもまったく見聞がない場合も少いと思われる。その点から、見聞なしとする回答をどのように理解すべきかには問題が残るが、ここでは情報なしを意味するとして処理されている。

未経験の事象の生起は如何に予測されるか（1）序報（高良・永田）

表 2-4 情報源に関する本人自身の判断と
予期的想像の関係：“就職不満足”（女性）

予期的想像	情報源		
	家族および知人 ¹⁾	テレビ	その他 ²⁾
高 い	29 ³⁾	15	14
	2.694 ^{4)**}	-2.809**	0.131
低 い	13	27	12
	-2.694**	2.809**	-0.131
計	42	42	26

- 1) 情報源の家族、知人を合併
 - 2) 情報源の新聞・本、見聞なしを合併
 - 3) 人数（合計 110名 体験者なし）
 - 4) 調整後残差
- ** $p < .01$

これらの事象について図 1-1、1-2 を参照すると、男性の場合、“大学留年”は予期的想像とパーソナルな伝聞機会のいずれとも高くなっている。ただし、その両方が高いことが情報源の相違と予期的想像の高低の関係が直線的事象であることの要件であるかという点、必ずしもそうとは云えない。例えば、“理想の結婚相手”は、男女ともに予期的想像が高く、パーソナルな伝聞機会も多い事象であるが、情報源の相違と予期的想像の高低とのあいだには直線的な関係は見られない。男性の“家に泥棒”は、パーソナルな伝聞の機会が相対的に多いものの、予期的想像の程度は中位程度である。また、女性の“就職不満足”は予期的想像とパーソナルな伝聞機会のいずれも高いが、“自宅全焼”は前者は低く、後者は中位である。

以上の結果は、事象によって、また、男性と女性によって、情報源が予期的想像と関連するか否か、あるいはその関連の仕方は相当に大きな相違があ

ることを示している。図1-1、図1-2の概括的な結果から示唆された通りである。予期的想像のためには、Kaplan (1972) が指摘するように、鮮明に生き生きと思い浮かべられる必要があるとすれば、身近かに経験者がいることが、必ずしも鮮明な想像を喚起するとは云えない可能性があるだろう。

また、対処への行為と想像とは区別されなければならない。鮮明な想像と対処的行為の喚起の関係は、改めて検討される必要がある問題といえるかもしれない。これらは、今後の研究課題となろう。

注

¹⁾この研究は、永田(1990)の研究を契機として、高良と永田の協同研究として継続されてきたものである。今回の報告は、その第1報告であるため未公開であった永田(1990)の資料を男性、女性を区分し、新たに分析し直したものである。再分析およびその後継中の関連する研究の一部は、高良美樹に対する『平成10年度公益信託宇流摩学術研究助成基金』の補助を得て行なわれた。

引用文献

- 広瀬幸雄 1995 環境と消費の社会心理学－共益と私益のジレンマ－
名古屋大学出版会
- Kaplan, S. 1972 The challenge of environmental psychology: A proposal
for a new functionalism. *American Psychologist*, 27, 140-143.
- 永田良昭 1990 未経験の事象を予期させる情報の媒体としての身近な他者
その他の媒体の機能について 日本社会心理学会第31回大会発表論文集,
166-167.
- Mercer, C. 1975 *Living in Cities: Psychology and the Urban*

未経験の事象の生起は如何に予測されるか（1）序報（高良・永田）

Environment. Penguin Books LTD. 永田良昭訳 1979 環境心理学序説：都市化と人間生活 新曜社

Noelle-Neumann, Elisabeth 1980 *The Spiral of Silence: Public Opinion—Our Social Skin*. The Univ. of Chicago Press 池田謙一訳 1988
沈黙の螺旋理論：世論形成過程の社会心理学 ブレーン出版

Rogers, E.M. 1982 *Diffusion of innovation*. 3rd ed. Free Press. 青池慎一・宇野善康監訳 1990 イノベーション：普及学 産能大学出版部